大分県芸術文化振興会議会報

芸振

No. 33　51. 12

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・辻　　英　武　編集人・衛　藤　　久

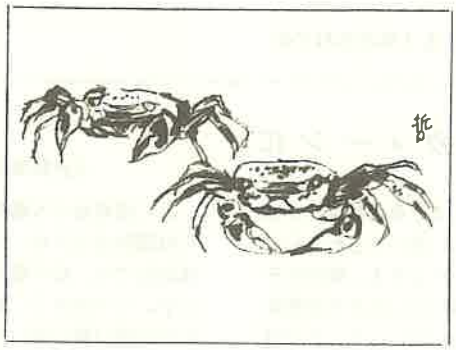
三者の協調から夢を

―地方文化・音楽教育・音楽協会―

大分県芸振会議副会長
大分県音楽協会長　辛　島　武　雄

＜地方文化の中で＞

県内の音楽文化水準を何で表明するかは大変むつかしいことである。他郡市や他県のその分野と比較してみると優劣はわかるにしても、だから水準線が低いと一概に言えるものでもあるまい。例えば、合唱音楽の実情はどうかなどと問われた場合、福岡県、熊本県、鹿児島県の合唱音楽の実績と比較してみることは出来る。この場合、決して大分県が優秀であるとは誰も答えられないだろう。ではその実績とは何であるかと言えば合唱コンクールの成績である。しかし合唱コンクールの成績によって、わが県内の合唱音楽のレベルが低いと判断するのも無理がある。けれどもこの方法以外には説明することも出来ない。



カ　ニ　　光風会会員　進来　哲

合唱音楽の向上をはかるためにはどの団体でもよいから九州で一位になるような合唱団が、突然でもよいからあらわれてほしい気がする。今年こそその美しいハーモニーを全県下の合唱団に示してほしい。

＜音楽教育について＞

すぐれた音楽演奏家を創出するためには何よりも音楽教育の充実を一層進めねばなるまい。例えば、県立芸術短大がこの目的を達しつつあることは認められる。しかし僅か2年制では、基礎の基礎は出来ても中途半端な教育に終ってしまいはせぬか。これはまことに社会的におしい気がする。4年制にはやく昇格するよう、国政や県政のレベルで考えてもらいたいものである。今年度か来年度に具体化の方針でもあるとすれば、夢の話ではなくなる。

＜音楽協会のあゆみ＞

大分県音楽協会が発足して、今年は10年目を迎える。協会は文字通り県内音楽関係者が協力して、学校音楽以外の社会的な音楽文化の向上に寄与すると同時に、会員自らの研修を怠らないための努力機関でもある。

日本従来の邦楽文化と、明治以来の洋楽的な音楽の混成した状態が、われわれの日常生活の中に生きている。これは大変おもしろいことで、世界的にみて日本文化の特色であると思うのである。どちらがどのように進展してどうなるかは考えまい。作曲家はこのあたりに目を光らせるだろう。

音楽協会は今年の行事を盛大にするために10周年記念云々と標示せねばならない。お互いに頑張って、立派な足跡を残したいものである。

[redacted]

大分県音楽の夢

「カルメン」「第九」に意欲燃やす

小　長　久　子
大分県民オペラ総監督・大分大学教授

昭和50年1月26日、東京芝公園郵便貯金ホールに皇太子殿下御一家をお迎えしてオペラ「吉四六昇天」を上演して以来、はや2年になる。

思いがけなく、この「吉四六昇天」の東京公演は全国に大きな反響をよび、その影響は地方から中央へとわが国文化の流れをかえ、地方においても「ふるさと」の再認識への運動の契機になったといわれる。

52年には大分において芸術会館の落成をみるが、会館の完成は、大分県文化運動に大きな転機をもたらすにちがいないと思う。

こうした52年に「県民オペラ」は大きな期待を持ち、メリメ原作、ビゼー畢生の名作「カルメン」を取り上げ、1月から練習に入る。帝劇、浅草オペラ華やかなりし明治の頃から、この「カルメン」の名旋律は、どれ程多くの人々に口ずさまれ、血を湧かしたことであろう。

しかし、このオペラは音楽的に非常に難しい作品とされている。

この秋、県芸術祭に上演した「魔笛」も1年がかりでの音楽作りが大変であったが、それにもまして舞台裏は五十九場の場面転換に引かれた舞台ソデのロープは百本に上ったという。それに3人の童子も台本通り空中船に乗って空から登場した。ヨーロッパでは、よく行われることであるが、わが国のオペラでは、おそらく大分がはじめてのことであろう。

また長年の夢であった県民によるベートーヴェンの合唱付シンフォニー「第九」を歌う会も発足、52年1月23日には初練習を行う予定である。

52年2月28日、3月3日には東京文化会館で日本オペラ協会によって「吉四六昇天」が上演される。大分県で創ったオペラが東京都助成の公演で再び東京の桧舞台に上るということは明るい話題である。

オペラの創作は台本、作曲、オーケストラの譜面書きと多くの手間と費用のかかる仕事であるが、今後も意欲的な作品を創作していきたいものと思う。

[redacted]

大分を日本のウィーンに

三　浦　敬　子
大分邦楽研究会会長・宮城会大分県支部長

邦楽は、洋楽に比べて、一般にあまり身近な存在ではないので、大衆向けの音楽ではなく、聞いてもわからない……などということをよく耳にいたします。確かにそうかもしれません。邦楽に何の関係のない人たちが邦楽に接する機会といえば、お正月ぐらいでしょう。この日本に古くからある、いわば私たちの心のふるさとである音楽、邦楽がこのような状態だということは、非常に悲しいことではありませんか。

そこでやはり、私の希望といたしましては、邦楽を洋楽同様大分県の皆様によく知っていただくということです。現在、邦楽の演奏会では、バイオリンやピアノ、フルートなど洋楽器を取り入れた曲も多く演奏されております。私どもは、こうして新しいものを取り入れつつ、しかも古いものを大切にして、大分県の邦楽のレベルが向上するように日夜努力しております。しかし、かんじんのお客様である大分県民の皆様がまったく無関心では、私どもの苦労も水の泡となってしまいます。

よく演奏会の入場券で、お義理で買う場合と、本当にその演奏会に行きたくて買う場合とがあります。大抵の演奏会では、前の場合が当てはまるのではないかと思います。その理由として、やはり大分県民が邦楽に対してあまり強い関心をいだいていないからではないでしょうか。もっとも演奏者側にも問題があるかもしれませんが演奏者のレベルを向上させるのは、よい耳を持った聴衆だと思います。

邦楽の演奏会にしても、入場券を売り出せばたちまち売り切れるようなものにしたいものです。そのためにも大分県の邦楽のレベルをもっともっと向上させたいと思っております。それには、大分県民の音楽に対する関心が向上することです。いつの日か、大分県が日本のウィーンであると言われる時が来る、そんなはかない夢を持ちつつ、また毎日努力を続けてまいりたいと思います。

[redacted]

「邦楽の美」伸展めざし

大分県三曲協会会長　遠藤梢山

邦楽といえば本来日本音楽ないしは日本伝統音楽を指す名称です。ところがこの名称は箏・三絃・尺八のように江戸時代末期及び明治以後に著しく発展した近代邦楽のみを指すようになりました。つまり古代もしくは中世に成立した雅楽や能楽は邦楽概念からはずされるようになりました。現在邦楽といえば近代邦楽のみを指す狭い意味に用いられるのが一般の習慣のようになっています。

さて三味線は三弦または三絃ともいっている、琉球から渡来した弦楽器です。箏は琴とも書かれますが現代では一般に箏のコトを使っています。箏は中国から渡来した弦楽器で生田流、山田流などの流派があります。尺八も中国から渡来した管楽器で明暗流、琴古流、都山流などの流派があります。終戦後、音楽教育の制度がいろいろと変わり洋楽はもちろんのこと邦楽も少しずつ学習するようになっています。現在では義務教育の音楽にも邦楽の旋法とか、邦楽の鑑賞があります。東京芸術大学音楽部には邦楽科があります。これらは邦楽の普及進歩に多大の貢献をしていると考えられます。

邦楽といえば宮城道雄先生のあまりにも偉大な功績を想起せざるを得ません。先生は十七絃の創作者であり、作曲や演技などに画期的な業績を残され、これらが近代邦楽はもちろんのこと伝統音楽全般に偉大な推進力となっていることも事実です。最近では名人級の演奏もラジオやテレビで聴けます。巡演または特別招待演奏会を地方で開催することも可能です。大分県下の邦楽愛好者や先生方は三曲、民謡、長唄と多数を極めています。それぞれの発想は好きや趣味であっても習い進むうちに上達し興味が増す、さらに努力し演奏会に出演する。社中の会あり、また県芸術祭への参加もできる状態の中で邦楽の発展と隆盛を願ってやみません。今後は邦楽の美である優雅さ、しんみりとしたよさなどいかにして戦後の若人に伝え知っていただくかという課題があります。立派なホールの環境でより多くの聴衆を迎え、演奏会ができることも邦楽発展に大きく寄与できるものと思います。

[redacted]

児童・生徒の特技を生かす教育

鶴田真清
大分県音楽教育研究会長・明治小校長

最近の子どもには、夢やゆとりや、豊かさといったものが、生活の中に欠けているような感じがしてならない。

高度経済成長策の下で、物資は豊かにはなったが、物の有難さやその価値観が薄れ、マスコミの発達した情報化社会の中で、知識としては色々な事を知っていても、社会の善や悪がいやおうなしに目から耳から這入って来るのに対し、その情報処理能力に欠けるために、色々なひずみが生じている。

孟母三遷の教えのように、環境が子どもの成長に重大な影響を与えることは、誰もが解り切る程知っていても、生活や仕事に追われて、つい意識が薄れてしまうのが現実であろう。環境の中でも、子どもの心の成長には人的環境が最も大事ではなかろうか。幼児は遊びが生活のすべてであり、遊びを通じて社会のルールや、責任感・忍耐・友愛といった精神的な成長が期待される。ところが、現在の子どもには、遊びたくても遊べない実態がある。学校から帰ると塾が待っているし、広場が少ない為にテレビや漫画にかじりついている者が多いようだ。時たま遊んでいると、家人から勉強を強いられる、といった具合で、全く哀れをさえ感じる。

近く教育課程が改訂されるが、その中で教材の精選・授業時数の1割削減が打ち出され、その余裕時間は学校裁量の時間として、ゆとりのある学校生活への志向がなされようとしている。ここで夫々の学校の実態に即した特色のある教育計画がなされるものと思われる。音楽の面で考えて見ると、現行の週2時間の音楽の授業だけでは、本当に身についた音楽指導も不充分で、生活の中に音楽を取り入れることも困難である。毎日々々ブラウン管から流れてくるマスコミ音楽の方が強力である。この際、児童・生徒の趣味や特技が生かされるように、アンサンブルや合奏・合唱といった活動を是非取り入れて頂きたい。そうすることによって、明るく楽しいゆとりのある、豊かな学校生活が期待できるのではないかと思う。

([redacted])

世界音楽フェスティバルを

野崎　哲

県民オペラ「魔笛」指揮者
県立芸術短大教授

夢は大きい程よい。大分に世界でも誇れるようなオペラ劇場を建設し、毎年、１ケ月から２ケ月間連続で、全世界から有名なオペラや交響楽団、その他一流の演奏家を参加させ、音楽のフェスティバルをやりたい。

そうすれば毎年、日本だけでなく、世界各地から多くの人達がおしかけ、大分は文化や経済といわず、国際的な都市になるであろう。街には外人好みのショップが立ち並びレストランやホテルは活況を呈し、大きな観光のルートにもなる。想像するだけでも楽しいではないですか。

さてその夢の実現にすこしでも近づくためには、どうしても地元の音楽のレベルアップが強く望まれる訳である。とくにオペラや交響楽団は、地方文化の中心となるのであるからなおさらである。

オペラや交響楽団の充実は、まずその構成メンバーとなる優秀なプレーヤーを備えることである。これは中央からよんでくる事も考えられるが経費の面で困難である。それでどうしても地元で養成しなければならない事になるが、まず考えられるのは、県立芸術短大を４年制の芸術大学に昇格させ、これを養成機関にする。そして一流のプレーヤーを教授陣にあて、オペラや交響楽団にも参加し、またプレーヤーの養成にも力を入れてもらえば、中央に劣らぬオペラや交響楽団ができるのも夢ではない。

さらにそれは、劇場専属のオペラ、交響楽団になり、音楽フェスティバルにも参加できるレベルにもなる。それに加えて合唱や、ピアニスト、作曲家、演出家、舞台監督なども育ってゆくであろうことを思うと、やはり我々は頑張らねばならないのである。

私が大分に来てから、大分は昔、小藩分立の国であったから、中々一つにまとまりにくいという事を聞かされてきた。しかし今はそんな事をいっている時ではない。日頃は仲の悪いのが１人、２人いても、大きな夢をもって、良い音楽を創り上げるためには一体となってやらなければ、大分の文化はいつまでも貧困の域から脱けだすことはできないであろう。

[redacted]

大分の合唱にかける夢

飯倉貞子

ウイステリアコール
荷揚町小ＰＴＡ合唱団　指揮者

先ず近くかなえられる夢の報告から。

自分達の合唱団の為に作曲された曲を持ちたいと長い間思い続けていたが、来年これが実現する。ウィステリアコール第25回定期演奏会を記念して、清水脩氏に大分県民謡の編曲を依頼中なのである。氏はオペラ「吉四六昇天」の大成功で大分に非常な好意を持って下さり、大分県民謡の編曲を快く承知して下さった。数多くの民謡の中から何を選ばれるかまだ知らされていないが、52年夏の定演は、わが大分県民謡の初演を成功させるべく団員一同大きな期待と決意を秘めて作品の仕上りを待っているところである。

次の夢は最近全国的に目ざましく盛んになったお母さんコーラスについて。大分県でも昨年から始められたＴＯＳの女性コーラスコンクールに刺戟されて、あっという間に、今ざっと思い浮かべるだけで15、６の団体が姿を現した。大きなステージに立てる。テレビに出られるとあって練習にも熱が入り、短期間に長足の進歩をとげた合唱団も多い。そこで考えるのは、大分県お母さんコーラス連盟（仮称）を作りたいということ。九州でも幾つかの県ですでに誕生している事だし、大分でも出来るのではないか。合唱祭、交歓会、勉強会など個々の合唱団ではやれない大きな事が出来て楽しいし力もつく。やがては他県の合唱団との交流など行動力あるお母さん方のバイタリティに夢は大きく広がるのである。

さて最後の夢は西部合唱コンクールで金賞をとることである。残念ながら西部（九州沖縄）での大分県のレベルは低い。これまでのウィステリアの成績をあげると、47年銀賞、48年銀賞、49、50年入賞せず、51年銅賞となる。不思議な事に入賞しなかった時は勿論、銀の時も金ははるかな物に思えたのに、今年は実現不可能な夢ではない気がして来た。大分県代表として全日本のステージに臨んでみたいと言う気持が強く湧いて来たのである。夢のまた夢かも知れない。でもやって見ようと思う。大分の皆さん、どうか大分市民合唱団ウィステリアコールに力をかして下さい。

[redacted]

これからが正念場

木　村　一八郎
大分交響楽団理事長

分響は創立当時より現在まで13年間、チェロの山本恭正院長、バイオリンの津崎健一、フルートの岡村光郎の三氏にトロンボーンの工藤氏らヴェテランで組織されている理事会によって運営されており、順調且つ健全に発展している。

もっとも分響創立から数年間は頭を抱え込むようなことも何回かあった記憶がある。

同志社大学（関西学院だったかも知れない）出身で、故尾高尚忠氏について指揮法を学んだという、山野愛一郎氏が主宰という形で大分交響楽団が結成されたのが昭和38年、団員は大分に交響楽団が生まれたという喜びと、これを大きく育てねばならない、という異常なまでの熱意に燃えていたが、全体として、団員の技術のレベルは極めて低く、また、運営資金は皆無という状態であった。

山野愛一郎氏は、何かの事情で1年足らずで大分を去った。指揮者を失った分響は、つぶれるかも知れないという危機にたった。しかし、山本、津崎、岡村の各理事を始め団員一同結束を固め、ついに大分大学から優秀な指揮者、加藤公康氏を迎えることに成功し、分響はこれでようやく腰が据った。

資金面については、発足当時より数年間は団員の毎月の会費が唯一の資金源であったが、練習場の借入れ、玖珠、佐伯、臼杵、津久見から毎週通ってくる団員の旅費の支給等経理担当の岡村氏らの苦労は大変なものだった。現在は県民オペラや定期演奏会からの収入等で、多少楽になったであろうが、それでもまだまだ大変だと思う。

分響が（分響でなくても、どこのオーケストラでも）大きく伸びるためには、一にも二にも団員の技術のレベルアップをまつ以外にない。団員は合奏馴れだけで満足することなく、大分・別府在住の立派な先生について、技術の基礎訓練から改めてやり直す心構えと実行とを期待したい。

[redacted]

〝声楽の大分県〟に

白　根　悦　子
別府女子短大教授

大分県の音楽芸術の声楽部門について私は一つの夢を持っている。「声楽なら大分県だ」と誰もが言ってくれる様な状態になりたいのである。それは単なる夢でなく、やれば実現可能の夢である。大分県人はいい声の素質を持っているので、それに磨きをかけて行けばいいのだ。声楽は発声訓練を行う年令が十五、六才位からでよい（但し音感の訓練は小さい時からやっておくこと）。器楽の様に満3才位から第一線級の演奏家に鍛えられている中央と地方の差はどうにもならない。それで比較にならない格差が成年になるまでに自然と出来てしまう。それから考えると声楽は大体同じ年令から始めるのでよき指導者さえ得られればそんなに中央部との差は考えられない。そのよき指導者としては、大分県出身で第一線で活躍しておられる方が沢山いるので、その方達に大分県の声楽の面倒を見て貰いたい。その中心になるのは何と言っても県立芸術短大でなければならない。短大でなく四年制の大学となってその音楽家達を師に迎えて面倒を見て頂けばどんどんいい声楽家が生まれると思う。四年制になればオペラ科だって考えられる。今県民オペラがあるが、県民と言っても個人的なオペラ組織を皆が援助している感無きにしもあらずだ。之も大学にオペラ科が出来、卒業生等も集まってやって行ける様になればもっともっと声楽的水準の高いオペラが望めるのではなかろうか。

次にこれから声楽を勉強する人達の耳を養う場として第一線級の声楽家の音楽会の多いことを希望したい（目下は余りない）。県内で声楽をやっておられる人達の演奏会の多くなった事は結構な事だが、そればかりだと井の中の蛙になってしまう。中にはこれが正しい発声でこんな演奏がいいものだと思い込んだら大変だなと思ったりすることもある。いいものを聞いて比較出来る耳を養い、そしてだんだん高い水準の勉強が出来ればどんなにいいだろう。そうなればいい声楽家も生まれるし「声楽は大分県」になれると信じる、いやきっとなれると思う。これが私の夢である。

[redacted]

民謡の宝庫をひらけ

加藤正人
民謡研究家・挾間小校長

去る十一月三十日、大分文化会館で開催された「ふるさとの祭り唄・祝い唄」は、第十二回大分県芸術祭開幕行事にふさわしく、大成功のうちに栄誉の重責を果たした。

この「ふるさとの祭り唄・祝い唄」は、大分県音楽（特に民謡）に生涯の夢を託する私にとって、構成・出演交渉・編曲・解説などの諸活動を通して、夢実現のための幾つかを試行する好適の機会でもあった。以下、その一試行の実情を吐露して、県下各地に今なお健在する民謡・郷土芸能の伝承者たちに今後の発奮を促したい。

「ふるさとの祭り唄・祝い唄」は、がっちりした組織と格調高い演奏で広く親しまれている萬謡会が、直接運営の中核となり、出演も萬謡会員を骨子としたものであったが、従前の「ふるさとの唄を求めて」などの催しに見られなかった第一の特色として、「湯平白熊唄」「佐伯堅田踊り」「杵築イノコ唄」「中津祇園音頭」など、地元伝承者の出演を数多く取り入れた構成となっていたことを挙げることができよう。この特色が、結果的には「ふるさとの祭り唄・祝い唄」を大成功に導いた一要因となったことは確かであるが、それが事前の出演交渉段階では、一方的に強い期待感を寄せるわけにはいかなかった。地元伝承者たちは、出演に要する諸経費は別として、大抵は「単純素朴な田舎臭い唄が、果たして観客の鑑賞に耐えうるものだろうか。」という不安のために、出演を渋るケースが多かったからである。だが、いざステージで演ずる段階となるや、たちどころに不安は霧消してしまい、大ホールにあふれる二千余人の観客がかもす感動のうずは、出演者に「ふるさとの唄」の真価を感得させるとともに、伝承の喜びを喚起してやまなかった。

大分県は、久しい間民謡の乏しいところだとされていたが、今では逆に民謡の一大宝庫として、全国的に注目を集めるところとなった。民謡は、祖先の人々が生活の中で歌い上げ、歌い継いできた「ふるさとの唄」であり、貴重な文化遺産であることに違いはない。数多い個性豊かな「ふるさとの唄」を、そっと宝庫の中に眠らせることがあってはなるまい。

[redacted]

壮大な
ブラス・フェスティバル

糸永信義
大分県吹奏楽連盟理事長

昭和47年10月1日、大分県芸術祭の開幕をかざって県民吹奏楽が演奏されました。県下各中学校合同のジュニアバンド100名、高校生・職場・一般のみなさんで編成されたシニアバンド100名、ゼームス＝バーダル氏の指揮のもと、華やかで壮大な音を大ホールいっぱいに響かせ、芸術的な香りを聴衆に充分たんのうさせたものでした。

日ごろ、私たちは団体別で40名位の演奏しか聞く機会がありませんから、音のバランス・音量・効果などの点でいろいろ多くの不満があります。それが100名の演奏となると、多少のバランスや音色、技術の個人差などの問題点がカバーされ、一つにとけあって雄大で荘重な演奏をより効果的に表現することができるのです。（音楽性の上で多少問題があるが……）

しかし、なかなか100名のメンバーを集めることは大変です。集まっただけですぐ立派な演奏ができるものではありませんし、プレーヤーは県下に散らばっていますのでその練習にかかる費用もばかになりません。かといって連盟でその費用をまかなう予算はありませんし、どうしても個人負担となります。すると、練習回数も制限されてしまい、実現がむずかしくなってくるのが現状です。

せめて、年1回位は全県下から優秀プレーヤーを集めて昭和47年に実施したような格調高い演奏会を開きたいものです。

それに、現在、県吹連で考えていることは、既に関西ほか全国各地で実施している2,000人の吹奏楽（タイトルはいろいろありますが）を大分市営陸上競技場で開催することです。各団体が思い思いの趣向をこらして、華やかに、ドリルあり・バトントワラーありの、いろいろな演技をとり入れて行進演奏をしたのち、全員で合同演奏をしたなら陸上競技場を埋めつくした大観衆の興奮は、大分市の夜空に壮大な感動となって舞いあがることと思われます。今度こそ、来年こそと思いつづけている夢にしたくない夢です。

[redacted]

波紋

大分のオケもじょうずになった。合唱の伴奏なら何でも、バッチリやれる。その伴奏で、ベートーベンの第九が、毎年きかれ、それがすべての音楽行事の、しめくくりとされる。市民もそれを楽しみにして待っている。

その時は、中央の楽壇で活躍中の、県出身のソリストたちが、次々と、交代で、毎年郷土のこの時の舞台に立ってくれる。

コーラスのメンバーも、登録された老も若きも交え、あらゆる階層を含む常連が、年一度の第九の出演を待っている。

西洋音楽は、キリスト教を離れては何一つ成立しない。楽譜も、ポリフォニーの発端も、対位法の完成も、鍵盤楽器の起りも、そして教授法に至るまでのすべてで、ギリシャの昔から「われわれは唯一の楽器として、平和の言葉を用いる――教会では生きた弦の琴を使う――それは、われわれの舌が、その弦である（教会の音楽は声楽であるべきだ）」として、合唱音楽は発展した。

豊かな人間の道として

田坂　保
大分県合唱連盟理事長

前夜祭のプログラムには「マニフィカート」様の大きな合唱曲が、レパートリーとして、歌われるのが通例とされる。

今や、合唱は燎原の火のように燃え拡がっている。それは女声合唱で、男声合唱の社会化がなければ、混声合唱の大きいものはやれない。それにしても、今年の合唱は、府内四百年来の合唱であろう。時間のいる問題である。

しかし、人は苦しくも、悲しくも、喜びもそのまま歌に託して表現する。楽は、調和をはかるものであり、徳性を高めるために用いられてもきた。

「人間の道」の世界に通ずる音楽が、地に潜む時は黒く暗い時代であった。人の心を昂揚させる作業唄、士気を鼓舞した軍歌も、情操と隣り合わせの意志の世界の問題である。

一国の文化が進み、正しい音楽が発達すれば、その空間は住みやすく、人の心を温める。「人は悲しいから泣くのではなく、涙が出るから悲しいのだ」とも言う。

[redacted]

自らの研修の中から

田中絹枝
創明音楽会大分支部長

音楽といえば西洋音楽をさすほど、邦楽は（箏、三絃）趣味的な存在で一部の限られた人達のものであると考えることが一般の考えの様でしたが今日では広い層にわたって邦楽に興味を持つ人が多くなりました。これは誠に喜ばしいことでございますが、真の邦楽の発展のためには興味だけで終らず、内容を広く着実に勉強する邦楽人口を増すことが大切です。それには指導者自ら広範囲の研修を積みました上で責任の持てる指導をすることだと思います。

通り一辺の指導に終らない様に指導者が常に求めて居ることも含めて指導すれば内容が更に深くなると言えるでしょう。将来の邦楽は特別のものでなく、身近なものにしてたのしめる様になればその中にすばらしい人達が自然に育つでしょう。私事を書いて恐縮でございますが教室に通って来ます4才ぐらいから小学校6年生ぐらいの数人の子供が箏に対する興味を通り越して誠にたのしそうに適確に曲を弾いて居る姿勢はほほ笑ましい感じでございます。好むと好まざるにかかわらず、あらゆる種類の音が絶えず耳に入ってくる。現代に育つ子供も将来邦楽に対してどの様な考えを持って行くか、大変興味のある処でもあり、又私の立場上責任のあることでもあります。これからも共に同志に子供をまじえて学んで行き度いと思います。

[redacted]

かわの眼科
河野　彰
大分市府内町2丁目5－9（トキハ北口通り）
TEL　大分（0975）32－2480
時間外　36－7547

第12回大分県芸術祭賞決まる

12月３日（金）、県総合庁舎63会議室において、県芸術祭運営協議会が開かれた。
議長宮崎豊氏の司会のもとに慎重に審議され、その結果全委員の一致した意見により次の各位に賞の贈呈が決定した。
なお、賞状贈呈式は12月22日（水）県総合庁舎63会議室において実施された。

◎ 芸術祭賞	大分県合唱連盟	「一大分県のうた一合唱音楽の夕べ」
	大分県民謡研究会	「ふるさとの祭り唄祝い唄」
	津久見市文化協会	「豊かで住みよい町づくりをめざす津久見市文化祭」
◎ 特別感謝状	米田貞一	「永年、県芸振会議会長として、県下芸術文化の振興に寄与」
	宮本昭嘉	「合唱音楽の夕べの指導・指揮」
◎ 特別功労賞	大分県高等学校文化連盟	「県高校中央文化祭の開催」
◎ 感謝状	大分県俳句連盟等	66団体

ニュース

◎11月２日（火）　文化庁の行う昭和51年度地方文化指導者海外派遣に、本県から県教育長山本峯生氏が派遣団の団長として出発。
　英・仏等諸外国の文化行政や、文化活動を視察調査し、本県の文化振興に資することを目的として派遣された。11月26日（金）帰国。

◎11月30日（火）　県芸術祭閉幕行事「ふるさとの祭り唄・祝い唄」が18時30分から大分文化会館において盛大に開催され、第12回県芸術祭の70行事の全てを終了した。行事数としても過去の芸術祭中最多数であった。

◎12月７日（火）　文化庁移動芸術祭巡回公演日田公演は18時から日田市民会館において劇団「民芸」（滝沢修等）により、「炎の人一ヴァンゴッホの生涯一」が上演され好評であった。

◎12月15日（水）　昭和51年版「大分の文芸」一大分県文芸作品集一の編集打合せ会が、県総合庁舎63会議室で開かれた。関係者の協力により、昭和52年３月に、県教育委員会から発行される予定。

◎12月22日（水）　県芸術文化振興会議理事会が10時30分から県総合庁舎63会議室で開催された。４月以降12月までの事業の報告をはじめ、芸術祭賞等について協議承認した。

◎12月22日（水）　第12回大分県芸術祭賞等賞状贈呈式を13時30分から県総合庁舎63会議室で行った。

◎12月22日（水）　県芸術祭運営協議会が14時から、県総合庁舎63会議室で開かれ、来年度県芸術祭主要行事について協議した。
行事予定
　開幕一県民オペラ「カルメン」　閉幕一県民演劇「創作劇・題材未定」その他。

消息

◦受賞　県芸振会長　辻　英武　氏
　11月３日　大分合同新聞文化賞（芸術文化部門）を受賞された。